

関西大学社会安全学部完成年度を迎えるにあたって

2010年4月に社会安全学部と大学院社会安全研究科修士課程が創設され、2年後の2012年4月には大学院博士課程後期課程が設置されて、大学院博士課程体制が出来上がった。来る2013年度は社会安全学部の完成年度にあたる。学部・大学院の同時設置という前例のないスタートを切ったのではあるが、本学部・大学院は特に2011年3月の東日本大震災を契機として社会から極めて注目を浴びる存在となった。学部・大学院修士課程の創設以来、学内にあっては社会安全学セミナーを継続的に開催し、2012年末で30回を数える。そのセミナーを起点として、「安全・安心を科学する（産経新聞出版）」、「検証 東日本大震災（ミネルバ書房）」を出版し、さらに2013年3月には「事故防止のための安全学」がやはり同じミネルバ書房から出版される。社会安全学部所属教員の活発なアクティビティはこれらにとどまらず、創設以来、すでに3回にわたって東京にてシンポジウムを開催してきた。毎回、多数の聴衆を集め、活発な議論を展開してきたのである。

学部所属の専任教員の担当分野は文理融合・分野融合という設置構想にしたがって多岐にわたるが、それぞれの分野における第一人者で構成されており、そのために自治体や各種公的機関などにおいての社会貢献も顕著である。2013年4月には学部生は全学年揃うことになり、2012年度より始まった専門演習も全体的にみて順調に推移している。2013年度にはこれら専門演習受講生は卒業研究を行うことになり、年度末にはその成果が卒業論文として取りまとめられることになる。専門演習は学生にとっては卒業研究のための準備であるとしても、すでに多くの学生が東日本大震災に絡む被害調査やさまざまな講演会・研究会に参加・発表しており、着々と成果は上がりつつある。2012年度より始まった大学院後期課程の院生からも、本号への投稿があり、厳格な査読をへて貴重な成果が公表されつつある。本社会安全学研究の今後の成否は、まさしく所属教員、院生/学生のアクティビティに依存しており、厳格な査読システムと相まって、レベルの高い論文誌として学外から高く評価されるように育てなければならない。

私も所属する米国機械技術者協会（American Society of Mechanical Engineers, ASME, 1880年創設）は創設時に British Philosophy と German Philosophy と称される二つの基本理念を置いた。前者は Professional solidarity, すなわち専門技術者集団としての社会的責任を果たすことであり、これが現在、世界的に通用するボイラや圧力容器の安全基準である ASME Boiler & Pressure Vessel Code につながっている。また後者は専門知識の印刷物を通じての社会への公表で、学会誌、学会論文集の刊行が専門家集団としての必須の要件であるとした。このような基本理念は ASME にとどまらず、各種研究機関に共通の規範であると思う。大学の場合にはさらにこれら基本理念に加えて、有為の人材の育成が加わる。我々の社会安全学部・大学院社会安全研究科も「社会安全学」構築に向けての共同研究・融合研究の途上にあるとはいえ、各種シンポジウム、刊行物などを通じて社会から大きく注目

を集めており、「社会安全」問題の専門家としての社会的責任を果たすことが期待されているのである。

学部・大学院はそれらの設置から完成年度を迎えるまでは、いわば試用期間であり、設置構想の検証期間でもある。本号に収録されている本学部・研究科の所属教員による多くの研究成果、社会貢献、外部資金獲得状況などは設置構想、教員構成が妥当なものであった傍証でもある。さらに2013年度末には所属学部生が卒業し、社会に飛び立つことになる。本学部で構想された教育体系がよいよ卒業生を通じて社会に評価・検証されることになる。彼ら、彼女らが社会に高く評価されるためには、学生生活の最終年度を中心課題である卒業研究に我々教員が如何にコミットし、どの程度熱意をもって指導したかが重要となるだろう。つまり学部生たちは3年間を通じて学んだ各種理論体系、ツールを総合して卒業研究に当るのであるから、まさしく設置構想においた文理融合・分野融合の「社会安全」概念が卒業論文に埋め込まれ、そしてなにより社会安全学部卒業生として体現されることになるのである。社会安全学部・大学院社会安全研究科としての正念場を迎えたといって過言でない。

2013年2月

関西大学 社会安全学部長
社会安全研究科長
(教授・工学博士)
小 澤 守